

故 名 誉 員 藤 井 真 透 氏 を し の ぶ



土木学会 名誉員 工学博士 藤井真透先生は、昭和 38 年 9 月 19 日午前 10 時 30 分、日本大学駿河台病院で狭心症のため突然永眠されました。人間ドックに入られ 3 週間の精密検査を終えて、なんの異常もなく退院される前日のことでした。謹んで哀悼の意を表します。

先生は明治 22 年 1 月 1 日宮崎県都城市で誕生され、第一高等学校を経て、大正 3 年 7 月東京帝国大学工科大学土木工学科をご卒業、ただちに大阪府に就職され、のち兵庫県に転ぜられて、大正 6 年明治神宮造営局技師として、明治神宮の造営にあたられるとともに、大正 11 年には母校東京帝国大学の講師となられ、以来、土木施工法、土木材料、道路工学、都市計画等の講座を担当せられた。

昭和 5 年にはワシントンにおける第 6 回国際道路会議に日本政府代表として参加、のち欧州各国を巡遊せられた。昭和 7 年工学博士の学位を授けられ、昭和 11 年には、土木試験所長に就任せられた。

昭和 13 年頃から学術振興会、科学振興調査会、学術研究会議等の委員になられその該博な蘊蓄を傾けられ、昭和 17 年には海軍施設本部第 2 部長になられたが、終戦後郷里都城市長に選ばれた。その後、昭和 22 年公職追放覚書仮指定があり 26 年同解除までは、先生の自適の時代ともいふべき時期があるが、27 年建設省道路審議会委員、日本大学工学部教授として華々しく復帰され、その後各種の委員会委員として各方面、各分野にご活躍をされていたのであった。そのうちのおもなものを列挙すると

総理府	首都圏整備委員会委員	消防庁	消防水利対策協議会委員
運輸省	都市交通審議会委員	東京都	都市計画審議会委員
厚生省	自然公園審議会委員	神奈川県	都市計画審議会委員
皇居外苑整備に関する打合委員会		東京都	建設工事紛争審議会委員
国鉄	鉄道安全会議委員		

などであり、いかに先生が広い分野にわたっての専門家であられたかの一端をうかがうことができると思う。

土木学会では昭和 10 年度の常議員編集委員長、11 年理事編集部長をされ、昭和 36 年 5 月名誉員に推挙された。

先生は学者であり研究者であります。また実際家でもあり、工事担当者としての業績は、大正 12 年頃の明治神宮外苑の舗装工事にその緻密な計画と、手腕をうかがうことができます。まだアスファルト舗装の揺籃時代にやられたあの舗装工事が、40 年後の今日も立派に役立っているのを見ることは、まったくの驚異であると思う。

大学での先生の講義は、まったく親しみやすく、解放的で他の先生の権威からくる重圧感のようなものはまったく感じられませんでした。あの独特の文字を黒板に書きながら微に入り細をうがったものでした。ただノートの整理には少々困りました。昭和 11 年～17 年の土木試験所長時代の先生は理論を背景として、現場の実際問題を試験によって解決するという方向に努力され、いろいろの設備等、試験所の基盤を築かれた功績は大きい。

戦時中は海軍施設本部第 2 部長として活躍、終戦とともに選ばれて郷里都城市長として当時混乱した社会情勢中であって、戦後の復興と民生の安定につくされた。退職後戸塚の焼跡に居を移されて、公職を離れ、自適の生活を楽しまうとせられたが、衆望黙しがたく日本大学教授として、再び若い学徒の指導にあたることになられた。

先生は若い学徒や教え子に対して異状ともいふべき、愛情を傾けられ、それらの人の動静については常に手にとるように知っておられた。はなはだしきは結婚予定日から、誕生日までを記憶していられ、対話中に、正確につきつぎと話されるのには驚嘆の至りであった。

先生の学術上の指導は、何事も計測の上に積み上げられてゆく点にあった。いろいろのデータが常に積み重ねられ整理されていたが、晩年は休養をとることの重要性を認識されて、毎日の休養時間を集計されその数字を見て、毎日の生活を調整されていたとき。

今年の 7 月には奥さんとともなって富士登山（5 合目まで）をされ、飛行機で九州へ飛び、郷里都城市の旧友知人と語り、書物の整理などもされたときが、まったく壮者を凌ぐ元気であったのに、幽明境を異にして再び先生の温顔を接するのを得ないのは返す返すも残念であるが、かえりみると先生の生涯はまったく清廉の一語につき、先生の偉大さを改めて追憶する次第である。

葬儀委員長としていささか奉仕することができ、ご恩の万分の一に報ゆることができればと思ひ、謹んでここにご冥福を祈る次第である。

【参議院議員 小沢久太郎・記】